
月守り

まりも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月守り

【Nコード】

N2308I

【作者名】

まりも

【あらすじ】

誰もが知っている御伽話、『竹取物語』。

だが、かぐや姫は実在し、物語の全ては実話だった。

かぐや姫の子孫を守り戦う一族、月守り。

代々続く月守りの家系、香具夜の当主に、若干12歳にして任命されてしまった蛭。

相棒の朔と共に奮闘する毎日を送っていたが…

蜘蛛と兎と少年と

「…眠い。」

「だからあれだけ昼寝しておけっていったらどう？」

「昼間は眠たくなかったんだよ。」

時刻は深夜2時。

すっかり寝静まった街を歩く、大きさのちがう二つの影がある。

「寝る子は育つって言葉知ってるか？夜眠れないのに昼寝もしないで寝不足が続いたら…その歳で身長止まるなんてことも有り得るな！。あー、可哀想。」

「…それ真剣に嫌。不吉なこと言わないでよ、朔^{さく}。」

「ははっ。牛乳もすっかり飲めよー。カルシウムは大事だぞ。」

本気で嫌そうな顔をして自分を見上げる少年に、大きい方の影の主、朔^{さく}はいたずらっぽく笑いかけた。

予想通りの反応に、満足そうな笑みを浮かべる瞳は、深みのある藤色。

月明かりに照らされる髪は銀色で、褐色の肌によく映えている。スラリとした背中から伸びた、髪と同じ銀色の大きな翼が、彼が人とは異なる存在であることを物語っている。

「僕まだ12歳。牛乳だつて飲んでるし、これから伸びるの、これ・か・ら。早く来い成長期！」

そう言つて、本日何度目になるか分らないあくびを浮かべ空を仰いでいるのは、小さい方の影の主、香具夜^{かぐや} 蛭^{ほたる}。

肩まで伸びた柔らかな髪は、一見黒色に見えるが、よく見れば深い藍色だと分かる。

あくびのせいで潤んだ大きな瞳も、同じく美しい藍色だ。

白衣に深草色の袴の神主衣装を纏^{まと}う肌は、透き通るように白い。

「それにしても、今日は平和だな。いつもなら、もうとっくに現れてる頃だろ。」

「よろこばしいことじゃないか。平和万歳つ。出来れば今日はこのまま何事も無く終つて…とにかく寝たい！」

「…噂をすれば。残念ながら、平和な散歩は終了だ。…来るぞ。」

朔の言葉が終わるか終わらないかのタイミングで、前方からガサガサガサ…と、何か大きなものが、地面を這う音が聞こえてきた。

「…うわー。今回はまたずいぶんグロテスクな見た目な敵さんだことぞ。」

音が近づくに連れ、物音の正体が明らかになると、蛭は顔を引きつらせた。

現れたのは、五メートルはあるであろう巨大な蜘蛛。大きさだけでも充分気味が悪いのに、その上体が毒々しい紫色、目が青色といっ

た具合なので、こちらが受ける視覚的ダメージはかなり強い。

「蛭っ！来るぞ！」

朔が叫ぶと同時に、蜘蛛が勢いよく、こちらに向かって糸を吐き出した。

それよりも一呼吸早く、蛭を抱えて朔が空中へと飛び立つ。

さっきまで蛭達が立っていた地面は、蜘蛛の糸に触れると、ジュッと音をたてて溶け、アスファルトの焦げる嫌な臭いが辺りにたちこめる。

「糸まで紫！もーホント勘弁して欲しいよ！」

近くの家の屋根へと着地すると、蛭は首から提げていた朱色の勾玉に左手で触れた。

すると、辺り一帯が、薄い赤色の光に包まれる。それと同時に蛭の手には、勾玉の光によって具現化された、朱色の弓矢が現れた。

「よし！結界張ったな！じゃあ、俺が攻撃してあいつの動きを止める、お前はそこを狙え！」

「了解。」

短いやり取りを終らせると、ちょうど蜘蛛が再度こちらに向かって毒糸を吐き出そうとしているところだった。

「させるかあっ！」

叫ぶ朔の姿は、人から獣へと変化していた。

その姿は、長い耳が特徴的な、銀色の巨大な美しい兎。人型の時と同様に、背中には翼がある。

兎などと表現すると、可愛らしい印象を与えてしまいがちだが、研ぎ澄まされた大きな爪と、鋭い紫電の瞳が美しくも恐ろしく、本来の兎のイメージからは程遠いものへとしている。

糸が吐き出される前に、跳躍して蜘蛛との距離をいつきに詰めると、蜘蛛の右目を爪で攻撃した。

鋭い爪に瞳をえぐられた蜘蛛は、長い手足をばたつかせて暴れている。

いつきに爪を引き抜き、朔は空へと舞い上がる。

「今だ！」

「いつけええええー！！！！！」

朔の合図と共に、蛭は先ほど具現化した弓矢を、蜘蛛の左目を狙って放つ。

朱色の光に包まれた矢が、ザクツと音を立てて蜘蛛の左目に命中すると、蜘蛛の体全体が、朱色の光で覆われる。

最後の抵抗なのか、大量の糸を撒き散らしてもがいていたが、程なく、そのまま地面へと吸い込まれていった。

「見た目の割りに、あっさり片付いたな。」

蜘蛛が完全に消えたのを確認し、人型に戻った朔が、蛭の方へと戻ってきた。

「あっさりじゃないよ。あの見た目…トラウマになりそう。」

頂垂れている蛭の手に握られた弓矢は、次第に形を失い、朱色の光へと変わり勾玉の中へと吸い込まれていった。

「確かになかなかインパクトのあるヤツだったよなー。こう、全力で毒蜘蛛ですって主張してるような。でも、あんなんで参ってるようじゃお前もやっぱりまだまだだなあ。この先、あれの百足版むかでとか出てくるかもしれないぞー。」

そう言っておどけてみせるが、蛭からは返事がない。

頂垂れたまま、ピクリとも動かない蛭を見て、そんなに蜘蛛の見た目にシヨックを受けたのかと少し心配になる。

「…ゴメン朔。僕、限界かもしれない。」

やっと返ってきた返事は、そんな弱弱しいもので、焦って蛭の顔を覗き込むと……

スヤスヤと穏やかな寝息を立てて眠っていた。

確かに、今日の蛭は絶好調に寝不足だった。

普通に考えて、12歳という年齢でこの時間に起きていることが困難なものも分かる。

分かる…が、しかし！

「立ったまま寝るなー！！」

静けさを取り戻した街に、朔の叫び声だけが虚しく響き渡った。

蜘蛛と兎と少年と（後書き）

はじめましてな投稿です。

しかもいきなり連載…

書きたいことはたくさんあるけど、文才がなくてまとまらないいいとにもかくにも、とりあえずは無事完結させることを目標に頑張っ
ていきたいと思えます。

物語の続き

お年寄りから小さな子どもまで、誰もが知っているおとぎ話、『竹取物語』。

だが、かぐや姫は実在し、全ては実話だった。

そして、物語には、人々に知られていない続きがある。

月界からの迎えと共に一度は月へ返ったものの、帝を愛していたかぐや姫は、その想いを抑えきれず、もう一度地上へと降り立つ。

再びすぐに月界へと連れ戻されたものの、その短い逢瀬おしせの中で、姫は帝の子を身籠みこった。

そうして、姫と帝の子どもが生まれたが、半分人の血が入ったその子を、月界へおいておくことは出来ず、姫は生まれた子どもを地上の帝へと託した。

愛する姫との、姫に似た美しい女兒を帝は大変喜び、その子は帝の元で大切に育てられた。

そうして、全ては上手く収まったかのように思われたが、しばらくすると、帝の屋敷を度々たびたび妖怪が襲うようになった。

かぐや姫に求婚し、条件としてだされた燕つばめの子安貝こやすがいを手に入れようとして断命した中納言ちゅうなごん石上麻呂そのかみのまろが悪霊となり、かぐや姫の娘を手に入れようと妖怪を操っていたのだ。

月界人の血を受け継ぐその子が悪霊の手に渡れば、どんな災いが降り注ぐか分らない。

かぐや姫は、愛する帝と娘を守るため、自分の月界人としての力を帝に渡した。帝はその力を、自分のもつとも信頼する側近達に与え、娘を守るよう命じた。

以来、彼等は月守りつきまもりと呼ばれ、何千年もの間、月界の力を駆使して石上麻呂いそのかみのまろと戦い続けている……

「あー、寝ちゃってたのかあ……。」

蛭が目を覚ますと、目の前一面に銀色が広がっていた。

「寝ちゃってたのかあ……じゃ、ないだろ！普通あのタイミングで寝るか！？しかも立ったまま！」

あの後、結局目を覚まさない蛭を、朔がおぶって運んでいたのだ。

「ゴメンって。でも睡眠は人間の三大欲求の一つなんだよー。我慢するのにも限界があるんだって。」

そう言って、自分の背中で大きなあくびをしている蛭を、朔は呆れ顔で振り返り、足を止めた。

この、どこまでもマイペースな少年が、月守りつきまもりの中でも上位の力を誇る香具夜の当代当主だと、現状からは誰も想像出来ないだろう。

しかし、蛍の髪と瞳がその力の壮大さを物語っている。

月界の力を持つ者は、体のどこか一部に藍色を有した容姿を持って生まれてくる。

そして、その藍色の強さと力の強さは比例するため、より多くの部分に藍色を持つ者が、大きな力を有しているということになる。

もっとも多いのは、片方の瞳が藍色というパターンだが、蛍の瞳は二つ共に藍。加えて髪まで藍色だ。

これ程の藍を有して生まれてきたのは、長い月守りの歴史の中でも、蛍を除けば300年前に一人きりとされている。

「起きたから自分で歩くよ。」

「いい。どうせもうすぐ家だ。このまま運んでやるよ。またいきなり寝られても困るしなー。」

背中から降りようとする蛍を止め、朔は再びゆっくりと歩き出した。

「あんまり甘やかすと、ダメな子に育つよー?」

「今日は特別。その代わり、明日からはきちんと昼寝すること。」

「了解。」

そっと翼に擦り寄る感覚を背中に感じ、朔は穏やかに微笑んだ。

不愉快な夜の優しい日常

香具夜神社かぐやじんじやと書かれた鳥居の下で、香具夜幸成かぐやゆきなりと、その妻、友枝ともえは、いつもよりも遅い息子の帰りを待っていた。

「今は何時だい？」

「もうすぐ四時半になります。」

「そうか…。今日は遅いなあ…。」

大きな力を持って生まれた彼等の息子は、まだ12歳という幼さにも関わらず、每晚見回りと云う名の妖怪退治へと出かけなければならぬ。

出来ることならば代わってやりたいが、片方の瞳にしか藍色を持たない幸成と友枝には、妖怪を倒すほどの力がない。

自分達など到底及ばない力を持っていることも、力強い見方が共に行動していることも分ってはいる。

分ってはいる…が、そこは親心。

少しでも帰りが遅くなると心配で仕方が無くなり、こうしていつも外で待っているのだ。

妖怪は夜の闇の中でしか活動できない。

夏真っ盛りの今、日の出はもう目前だ。

いつもなら、帰ってきている時間なのだが…

「あなた、あれ！」

友枝の視線を追うと、朔の背に抱かれた蛭の姿が目に入った。

「おお！帰ってきたか。」

「でも、朔に背負われているわ。まさか、どこか怪我でもしたんじやっ…」

「香具夜の次期当主様ともあろう者が、そんな簡単に怪我なんてするわけがないだろう。」

二人の心配を嘲笑うかのように冷たくそう言い放ったのは幸成の兄、かぐやのぶなり香具夜信成。

両の瞳が藍色な信成は戦闘能力も高く、蛭と同じく毎晩妖怪退治を行っている。

どうやら信成も見回りを終え、今帰ってきた所だったようだ。

「しかし、戦闘が終るなり即熟睡というのも、当主としてどうかと思うがな。子どもだからと言って、責任感や緊張感がなさすぎるんじゃないのか。ああ、でも蛭には優秀な殺戮おとこころ兎が付いているからないざとなれば、なんとでも…」

「おいこら、信成。」

長々と嫌味を言っている間に、鳥居の下へと辿り着いた朔の怒気を含んだ呼びかけに、信成はピタリと言葉を止めた。

「俺は耳がいいんだ。最初っから全部まる聞こえだぞ。だいたい、戦闘が終るなり即熟睡って、何でお前が知ってるんだ？あー、そうか。どっかから見てたんだな。仲間が戦ってるっていうのに、助け

もしないでただ見物してたわけだ！そんな腰抜けに、責任感がどーの、緊張感がどーの言われる筋合いはないんじゃないか？」

そう言い放つ朔は、蛭と話している時とはまるで別人のようだ。

信成を見据える目はどこまでも冷酷で、凍てつく様な冷たい空気を纏まとっている。

敵意を向けられているわけではない幸成と友枝でさえ、思わずぞつとして固まってしまった。

信成はというと、恐怖と悔しさで顔を歪め、言葉を失っている。

朔が更に追い討ちをかけようとした時、背中から伸びた手にそつと口を塞がれた。

「朔、ストップ。」

振り返ると、いつの間にか目を覚ましていたらしい蛭の暖かな笑顔とぶつかった。

「…いつから起きてたんだ？」

朔の質問を笑顔ではぐらかして背中から降りると、蛭は幸成達へと歩み寄った。

「父様、母様、ただいま帰りました。」

「…あつ、ああ。おかえり蛭。」

先程までの、身の凍てつくような空気のせいで返事が一瞬遅れてしまったが、無事に帰ってきた目の前の息子に、幸成は笑顔でそうした。

隣で友枝も、おかえりなさいと穏やかな笑みを浮かべている。

続いて蛭は、まだ固まったままの信成へと歩み寄る。

「おじさん、僕の当主として足りない所を教えて頂けるのはとてもありがたいんですが、そういったことは父様や母様にじやく、直接僕に言って下さい。あと、何度も言っていますが、朔の事を殺戮たつじく免めんと言つのはやめて下さいね？」

言いたいことを言い切ると、蛭は朔の手をとり神社の石段を上り始めた。

それを見て、幸成達も後へ続き、その場には信成一人が残された。

「あいつはっ！いつもグチグチグチグチ：だあーうっとおしい！嫌味以外の事が言えないのか！？」

「いつも嫌な思いをさせてすまないね。あの人も、本当はそんなに悪い人じゃないんだが。」

石段を上りながら、怒り心頭といった様子の朔に、幸成は困ったような笑みを浮かべ謝る。

「兄は昔から、香具夜の次期当主になるために本当にたくさんのお力をしてきた人だから：色々とやりきれないものがあるんだと思う。」

香具夜の次期当主には信成がなるはずだった。

両の瞳に藍色を有し、一族の中でも一二を争う程の力を持っていた信成。

誰もが、次期当主は信成だと信じて疑わなかった。しかし、蛭が生まれたことで状況は大きく変わった。

両の瞳に加え、髪までもが深く美しい藍色。

その力は未だ計り知れず、殺戮兎と恐れられ嚴重に封印されていた朔を解放し、味方につけるといふ所業を成し遂げた少年。

力や素質では敵わないと分っていても、何十年も自分が手に入れられると信じていた地位が、まだ幼い蛭の手に渡るとなれば、相当の悔しさがあるのだろう。

「でも、継承の儀式が終って正式に蛭が当主になれば、気持ちの整理をつけて態度を改めてくれると思うんだが……」

「んな何ヶ月も待てるか！」

蛭は、当主に任命はされたものの、まだ正式に継承したわけではない。

香具夜では継承の儀式を終えて、はじめて名実共に当主となる。

儀式が行われるのは今度の十五夜なので、蛭が正式に当主になるのはあと数ヶ月先のことだ。

「気持ちの整理なんて今すぐつける！態度も今すぐ改めろっ！」

「朔、うるさい。ご近所迷惑ー。」

今まで黙って隣を歩いていた蛭が、いつまでも怒りのままに叫ぶ朔を止めにはいっただ。

「おーまーえーはあああ…俺が誰のために怒ってると思ってるんだ！」

「僕のため。」

「…嬉しそうに言うなあーっ！」

表情の変化が乏しい虫にしては珍しい、ニコニコと効果音が聞こえてきそうな満面の笑みを浮かべはつきりと放たれた言葉に、またしても朔が叫ぶ。

しかし、その声にもう怒りの色はない。

「だから叫んだらご近所迷惑だつてば。朔が僕のために怒ってくれてるのはよく分ってるよ。でもさ、こんな朝早くから外で大きな声をだすのはやっぱりまずいでしょ？大丈夫、そんなに大声で叫ばなくても、朔の愛はちゃんと僕に伝わってるから。」

「愛ってなんだ、愛って！」

「僕も愛してるよー、朔ー。」

「棒読みで言うなっ！」

「もともとこんな喋り方なんだよ。でも、朔がそう言うなら気持ちを入れてもう一回…！」

「言わんでいいっ！」

いつも通りの微笑ましいやり取りを、幸成と友枝は穏やかに見つめ

た。

殺戮兎と恐れられている、今は青年の姿をした銀色の兎。

朔がこんなにも柔らかかな空気を纏うのは、きつと蛍の前でだけなの
だろうと思うと、目の前の光景がひどく愛おしいものに思えた。

月ノ宮を目指して

「ん？なんだ昼間っから正装して。どこか出かけるのか？」

昨日の失敗を踏まえ、朝の神社の業務を終えた後、蛍はたつぷりと睡眠をとった。

そして、15時をまわった頃に起き出してきた蛍は、妖怪退治の時に身につける白衣に深草色の神主衣装だった。

「今日は、ねがひ 蛍貴のところと呼ばれてるんだよ。」

「へー、ほーお…お姫様にねえ…それはそれは。」

「…。何そのニヤニヤ顔。」

蛍姫とは、つきのみやゆすき 月ノ宮^{つきのみや} 蛍貴のことだ。

彼女こそが、月界人の血を受け継ぐかぐや姫の子孫であり、蛍たち月守りが守るべき絶対の存在である。

「別にー？よかったじゃないか、会うの久々だろ？」

蛍貴は、蛍よりも一つ年下の11歳だ。

蛍貴はその立場ゆえに、厳重な結界に守られた月ノ宮の屋敷から出ることが出来ない。

学校へ行つて友達を作ることできないような生活は、幼い姫にとって相当窮屈なものだろう。

そのため、歳の近い蛍が、話し相手として時々呼ばれるのだ。

「今朝はどことなくご機嫌だなーと思つてたら…成程、そういう理^{わけ}

由だったのか。愛しのお姫様との久々の再会、そりゃあ気分はもうワクワクだな！」

「…。」

相変わらずのニヤニヤ顔で、うんうんと頷きながら話す朔を、蛭はぼーっと見つめた。

「おい…放っておかされると困るだろうが。ここは、別にワクワクしてなんかっ…とか、僕は袖貴のことそんな風に思ってたなんかっ…とか、そういう照れ隠し的な反応を返すところだろう。」

「だって、袖貴が好きなのも、会えるの嬉しくてワクワクしてるのも事実だし。」

「ぼーっとした顔で淡々と返すなあーっ！お前には照れるという感情がないのかっ!？」

「これでも実はスゴイ照れてるんだよ。」

「嘘っけー!」

そんなたわいのないやり取りのあと、蛭と朔は揃って月ノ宮邸へと向かった。

「…暑い。」

「そりゃ昼間からそんな格好してりゃあなあ。」

「…夏はどおして暑いんだろうね。」

思わずそんなどうしようもない疑問を抱きたくなるほど、真夏の昼間に神主衣装で外を歩くのは重労働だった。

自宅の香具夜神社から月ノ宮まで、それ程距離があるわけではない。しかし、今日は途方も無く長い道のりに思える。

「というか蛍、あんまり話しかけるなよ。俺は、普通の人間には見えてないんだから。」

朔の姿は、力のあるものにしか見ることが出来ない。

そのため、街を歩く力を持たない人たちには、蛍が独り言を言っているように見えてしまうのだ。

「そーだった。つい忘れちゃうんだよねー。」

朔と共に出かけるのは、ほとんどが人気の無い夜中だ。

そのため、人目を気にするという習慣がなかなかつかない。

それから黙って歩くこと10分、辺りを竹やぶに囲まれ、『月ノ宮』と立派な表札が掲げられた高級料亭のような佇まいの屋敷が見えてきた頃、蛍は暑さで完全にばてていた。

「ほたるー、生きろよー。」

「…。」

朔の言葉に蛭は黙って頷き、再びのろのろと歩き出す。

前を歩く背中には覇気が全く感じられず、何やら今にも倒れてしま
いそうだ。

しかし、柚貴に会えばきっと元気を取り戻すであろうことを朔は知
っている。

「中で柚貴が待ってるぞ！」

お姫様をあんまり待たせるもんじゃないと励まし、朔は蛭の背中を
グイグイと押した。

僕のお姫様

月ノ宮邸に着くと、すぐに柚貴の部屋へと通された。

案内をしてくれた屋敷の使用人が立ち去り際、柚貴には内緒だと言つて、姫様は約束の時間の何時間も前から時計とにらめっこをして蛭様がいらっしやるのを楽しみになさっていましたよと、教えてくれた。

自分と会うことを柚貴も楽しみにしていてくれると聞き、暖かな気持ちが届き上がる。

「柚貴。入ってもいい？」

部屋の前で呼びかけると、中からは返事の変わりにバタバタと慌しい足音が聞こえ、勢いよくふすまが開かれた。

「蛭っ、いらっしやい！」

顔を出したのは腰まで届く美しい黒髪の愛らしい少女。

瞳は髪よりも深い漆黒で、あまり外に出ることがないため、肌の色は初雪のような白。

夏用の薄い赤の着物がよく似合っている。

始めて会ったとき、何だかお雛様のような女の子だと思ったのを、蛭は今でもよく覚えている。

「久しぶり。どこもケガしたりしなかった？病気になるたりしなかった？」

柚貴は、蛭に会うと決まって最初はこの二つの質問をする。

自分を守るため日々戦う蛭。

妖怪との戦いで、危険な目にあっていないだろうか。

寝不足で、体調を崩したりはしていないだろうか。

柚貴の心配は尽きることがない。

「平気だよ。いたって健康、どこも問題なし。」

「でも、何だか顔色が良くないわ。」

今日の蛭は、どことなく疲れているように見える。

柚貴は笑顔が曇り、心配顔になる。

「あー、それはきつと外が暑かったからだよ。それに、この格好のせい。いつもは夜しか着ないから分らなかつただけど、袴って夏に着てるとすごく暑いんだ。」

「だからって、お前は体力なさすぎ。最後の方なんか、俺がひきずって歩いてるようなもんだつたぞ。」

朔は呆れ顔で蛭を見下ろす。

「うん。あれは楽しかった。今度昼間に神主衣装で出かけなきゃいけない時は、全面的に朔に助けてもらおう。」

「人に頼るなー！自分の体力のなさを改善しろ！」

「分ってるよー。冗談なのに。」

「嘘つけ！」

目の前で繰り広げられる二人のやり取りを見て、本当に蛭はただ暑さでバテているだけだと分ると、柚貴はほっと胸をなでおろし笑顔を取り戻した。

「今日もとっても仲良しね。二人とも、部屋の中は涼しいから入って。」

明るい笑い声とともに部屋へと手招きされた。

柚貴の言葉通り、冷房の効いた部屋の中は大変快適で、冷たい麦茶の効果もあいまって蛭はすっかりと回復した。

「今日は、蛭に渡したいものがあるの。」

お互いの最近の出来事を報告し合い、話が落ち着いたころ柚貴がそう言って着物の袖から何かを取り出した。

手渡されたそれは、上等な銀の生糸で作られた結び紐だった。

「世話係の人にお願いで、用意してもらったの。この間会った時、勾玉を結ぶ紐が大分弱っているみたいだったから。」

ずっと身につけているため、痛むのが早いのだろう。

蛭は普段は小まめに結び紐を変えているのだが、今回はすっかりしていたようだ。

そこで柚貴は、この機会になかなか痛まない丈夫なものを自分がプレゼントしようと思ったのだ。

「ありがとう。大事にするよ。」

柚貴の気遣いに暖かな笑みが浮かぶ。

蛭は首から勾玉をはずすと、その場で紐を付け替えた。

「やっぱり、その朱色には銀色がびつたりね。」

柚貴は、蛭が首に下げなおした勾玉にそっと触れると、満足そうに
呟く。

「この勾玉は、昔のお姫様が作ったのよね？」

「言い伝えによると、そうらしいねー。」

蛭が持っている勾玉は、何千年も前のかぐや姫の子孫が作った、力の制御装置のようなものとされている。

人の体に月界の力を有するのは、身体に相当な負担を強いる。

そのため、蛭のように大きな力を持つ月守りは、この勾玉を身につけることによって普段は力を眠らせておくのだ。

そして、力を使う際にのみ、左手で勾玉に触れ力を解放する。

「昔のお姫様はこんな物が作れるくらい、月界の力が強かったのね……。何だか、今からだと思じられない。」

まじまじと勾玉を見つめ、柚貴が呟く。

柚貴には、ほとんど月界の力がない。

朔が見えるのだから、全くないというわけではないのだが、ほぼな
いに等しい。

かぐや姫と帝の子が生まれてから、もう何千年もの時が流れた。

その間、途切れることなく姫の血は受け継がれてきたが、時を経る
ごとに月界人としての血は薄れていき、力はなくなり、今ではもう
ほとんど普通の人間とかわりない。

言い伝えによれば、月界人の血が完全に失われ、かぐや姫の子孫が
ただの人間となれば、石上麻呂は黄泉の国へと帰るとされている。

石上麻呂が手に入れたいののは、かぐや姫の血を引く娘であって、月
界の力を持たないとなれば、それはもはやかぐや姫の血を引いてい
るとは言えない。

そのため、地上に留まる理由がなくなってしまうのだろう。

姫の子孫がただの人間になる日まで守り抜くことこそが戦いを終ら
せる唯一の手段であり、それが月守りに科せられた使命なのだ。

「今日はずっとも楽しかったわ。会えてすごく嬉しかった。気をつ
けて帰ってね。」

「僕も楽しかったよ。結び紐も、本当にありがとう。」

楽しい時間というのはあつという間に過ぎるもので、気付けば蛍が
帰らなければならぬ時間となっていた。

玄關まで見送りに出てくれた柚貴に別れを告げ、月ノ宮をあとする。

手を振る柚貴は笑顔だったが、その笑顔が彼女の精一杯の我慢で出
来上がっていることを蛍は知っている。

本当は、蛍と一緒に外の世界へと出たくて仕方がないだろう。
帰らないでと引きとめたくて仕方がないだろう。

生まれてから一度も屋敷の外へ出たこともなく。

蛍以外の歳の近い友達を作ること出来ず。

ずっと、あの広い屋敷で大人に囲まれて過ごす。

身の回りのことを全て人に管理され、両親にさえ自由に会うこと
が出来ない。

想像するだけでも寂しさや息苦しさで、胸がつまる。

それでも柚貴は、それが嫌だと言うことすら出来ない。

柚貴は知っている。

自分を守るためにたくさんの人間が戦っていることを。

その戦いで、命を落とす者があることを。

そして何より、蛍もそんな戦いの真っ只中にいるということ。

それを分っていて、結界のない屋敷の外へ出たいなどと口にするこ
とは、柚貴には出来ない。

自分が屋敷から出ないことで、少しでも蛍達の負担が減るのならそ
れでいいと、自分に言い聞かせ、決してわがままを言わない。

そんなけなげで暖かな柚貴を、蛍は本当に大切にしたいと思う。
自分を守るべき姫が、柚貴であることを心から嬉しく思う。

…彼女を守る力が自分にあって本当によかった。

「何とか、もうちょっと自由に会えないかなあー。」

ぼんやりと浮かび始めた月を見上げ、蛭が呟く。

「あ。いつそ、忍び込むのとかどうかな？屋敷の構造にも大分詳しくなっただし。」

「お！いいねえ！そういうことなら全面的に協力しよう。」

力強い返事を返す朔に、冗談だよと蛭は苦笑した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2308i/>

月守り

2010年10月14日15時23分発行